



故 澤江 義郎 先生

一般社団法人日本感染症学会名誉会員

1935 年 1 月 6 日 生

2023 年 9 月 19 日 逝

故 澤江 義郎 先生
(2023年9月19日)

略 歴

【学歴】

1959年3月 九州大学医学部医学科卒業
1964年3月 九州大学大学院単位取得のため退学

【職歴】

1964年4月 九州大学医学部附属病院第一内科 助手
1973年4月 九州大学医療技術短期大学部 助教授
1975年4月 九州大学医療技術短期大学部 教授
1995年4月 九州大学医療技術短期大学部部長 併任
1998年4月 福岡県保健福祉部社会保険管理課 指導医療官
1998年5月 九州大学医療技術短期大学部 名誉教授
1999年4月 国家公務員共済組合連合会新小倉病院 院長
2004年4月 三萩野病院

【学会活動歴】

入会 1961年4月
評議員 1979年3月～ 1989年3月
2003年4月～ 2004年3月
理事 1995年4月～ 1999年3月
監事 1989年4月～ 1995年3月
1999年4月～ 2003年3月
名誉会員 2005年4月～ 2023年9月

第65回日本感染症学会西日本地方会総会・学術集会 会長 (1995年11月30日～12月1日)

第74回日本感染症学会総会・学術講演会 会長 (2000年4月21日～22日)

老朋友を悼む

九州大学医学部、澤江義郎名誉教授の訃報に接し、只々残念・無念との感情の他に何とも言葉に現し難い寂しさが込み上げて来ました。

澤江先生とは、1979年（昭和54年）第27回日本化学療法学会総会が、九大医学部泌尿器科学教室、百瀬俊郎教授により、九州の地においては16年振りに開催された折が、初めての出会いでありました。学会におけるプログラム委員会と称し、当時の若手研究者約50名を一同に集め、それも大広間の御座敷であり、その場ばかりでなく学会全体を取り仕切ったのが、澤江先生でありました。当時彼は若くして、既に九大第一内科学教室の講師であったように記憶しております。

当時における化学療法ならびに感染症分野の専門家は、全国的にも非常に少なく、その一因としてペニシリンGの発見以来、数々の化学療法剤の開発により、感染症は克服されたかの様相を呈したことが挙げられます。そのため我が国最大規模を誇った“日本伝染病学会”も衰退の一途を辿り、“日本感染症学会”と名称を変更する事により、伝統を継続せざるを得なかった時代でありました。そういう背景にあった時代に、16年振りとなる九州地区において開催されたのは、画期的な事でありました。澤江先生は、その当時感染症・化学療法の研究領域において九州地区を牽引しておられました。

澤江先生は、頭脳明晰な方でした。九州の名門“小倉高校”から現役で、九大医学部に合格された秀才であり、九大医学部での成績も大変良かったそうであります。それも本人から聞いた話であります。「貴方は学生時代成績は良かった筈だ」との間に、恥ずかしそうに「良かったかな」と一言でした。又、彼は大変な美男子、今様のイケ面でした。行動も活発で、更には相当な健脚で博多の夜の巷から博多駅まで歩かされた事もありました。

当時における研究テーマは、抗菌化学療法剤の体内動態の測定法が主流でありました。

鳥居・川上の重層法に始まり、Capillary法、Paper disc法、Cup法とBioassayのみの測定方法でありましたが、その後アミノ配糖体系抗生物質の測定法としてEIA、RIAと画期的な測定法が開発され、その後HPLCによる測定法も登場し、今日におけるPK（Pharmacokinetics）、PD（Pharmacodynamics）の導入と相俟って大いに発展した時代であります。

当時、澤江先生の研究室は「澤江研」と呼ばれていましたが、我が研究室も、彼とは同じ方向性を向いた研究をしていた関係上、測定方法に関して学会において激論を交わした事も、つい先頃の様な気が致します。

澤江先生は、確固たる意志の持ち主でありました。1970年代に入ると国際学会が活発となり、そこに演題を出す気運が高まり、特に米国におけるICAAC（Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy）にて演題を発表する事がありました。当時世界最高峰のこの学会はレフリーが非常に厳しく、仲々演題が採用されず、演題が採択された時の嬉しさは何物にも変え難く、彼とは共に切磋琢磨し出席した若き日の思い出でもあります。

他方、ICC（International Conference of Chemotherapy）国際化学療法学会に関しては、多くの場合演題は採択され、国際交流の場でありました。澤江先生は、この学会には頑として演題を出さなかったように思います。「国際化学療法学会は交流の場としては有益であるが学問的にはどうか」との理由でした。本当に立派な考えの持ち主であったように思います。

澤江先生は、日本感染症学会にも大変に貢献され、日本感染症学会 第74回総会会長を2000年（平成12年）に主催されており立派な会でした。

その際、目玉となる特別講演に「外国の演者を紹介して頂かないか」との依頼を受けました。その折、「貴方は内科医、私は外科医であり多少演者選択の方向性が変わるかも」と申しました所、「貴方が招請してくれることが何よりである」との事で、パスツール研究所のCourvalin教授を紹介し快諾を得て、大変に喜ばれました。Courvalin教授は、腸球菌の薬剤耐性遺伝子の耐性メカニズムを解明された世界屈指の研究者であり、立派な特別講演をされ、澤江先生には大変喜んで頂きました。

澤江先生は、立派な学者であると同時に反面ユーモアの持ち主でもありました。博多での或る一夜、「美味しい物を食べに行こう」と誘われ案内されたのが、川沿いに並ぶ屋台の有名店でした。出された自身の薄造りは“ふぐ”との事でした。本当に美味で今でも忘れ難き思い出であります。さて、二次会と言うことになり、道すがら「屋台も満更捨てたものではないでしょう」との話から、「実はあれは、“かわはぎ”です」とポツリと一言、嬉しそうに笑っていました。一杯食わされたと思いましたが、それ以来“かわはぎ”のファンになり、新鮮な“かわはぎ”は“ふぐ”にも匹敵する一品と思うようになりました。勿論の事、博多のふぐの名店にも連れて行って貰っています。アルコールに関しては、それほど強い方ではなかったように思いますが、綺麗な飲み手でありました。

澤江先生の病状については、早くから知っておりました。彼は非常に筆まめの方で、今年だけでも3回に渡り病床にありながら葉書きを頂いております。

2022年12月13日発熱、悪性リンパ腫との診断を受け入院し、化学療法治療後、本年2023年2月24日経過順調にて、一時退院との知らせにより、「寛解するぞ」との期待を膨らませて

おりましたが、その甲斐もなく永遠の別れとなりました。
どうか安らかに御休み下さい。

2024年1月

中山 一誠 記

(元) 日本大学医学部第三外科学教室

一般社団法人日本感染症学会 名誉会員)

澤江義郎先生の死を悼む

私が澤江義郎先生の研究室に配属されたのは、1988年です。以後30年あまり、ご指導、ご助言いただいていたことになりました。とても聡明な先生で、時に厳しい指摘をされる先生でしたが、私どもには優しく、面倒見のとてもいい先生でした。その先生が2023年9月19日にご逝去されました。私どもにとって大黒柱を失ってしまったようで、残念でなりません。心よりお悔み申し上げます。

澤江義郎先生は、小倉高校の出身で、九州大学医学部に入学後、1959年（昭和34年）3月に卒業され、1960年4月に九州大学第一内科に入局されています。木村光雄先生の研究室に配属となり、そこで溶連菌の起腎炎物質の研究に従事し、学位を取得されています。消化器の二重造影などにも熱心で、感染症のみならず、消化器も含めオールラウンドに教室員を指導されてきています。1973年には医療技術短期大学の助教授となり、同じ頃から、外務省の海外僻地に在住する邦人の巡回診療に参加され、中東やアフリカ、南米なども訪問されるという、国際協力にも従事されています。1976年に教授に就任され、長年臨床検査技師の育成にも従事されました。その当時、私たち研究生は研究室に入っても、最初のうちはグラム染色や、実際の細菌培養、同定といった基本的な手技も行っていました。今から思うと本当に貴重な体験になったと思っています。研究テーマとして、種々の日和見感染症に関するものや新規抗菌薬の感受性検査に関するものなどに取り組んでいました。1995年から3年間は短期大学の学部長を務められ、保健学科の4年制化にむけて注力されています。

九州大学に在任中の学会活動として、1979年からは日本感染症学会の評議員はじめ監事、理事に携われて、西日本地方会の事務局としても長年従事されています。1995年には、第65回日本感染症学会西日本地方会総会・学術集会、そして2000年には第74回日本感染症学会総会・学術講演会を会長として開催されています。

2024年1月

退官後は、福岡県庁で医療指導官を1年間なさったあと、国家公務員共済総合連合会 新小倉病院の院長を5年間務め、経営の改善に取り組まれています。院長退任後も仕事をするのが趣味のような先生でしたので、87歳まで三萩野病院で臨床に携わっていらっしゃいます。これまでの先生の活動に対して、「従四位、瑞宝小綬章」を受章され、私どもとしても大変嬉しく、誇らしく思います。

先生は、厳しいところもありましたが、患者さんに対しては面倒見がよく、時間外に来院した患者さんにも、広いキャンパスの端から端まで自転車を漕ぎながら診察に向かわれていました。そういう先生ですので、多くの職員の信頼も厚く、外来主治医として診察されていたように思います。亡くなる1年前まで診療されていたことから、医師としての仕事が好きで、生涯を全うされたように思います。退官後も、研究室で行う夏や冬の集まりにもずっと出席いただいていたし、それ以外にも学会や研究会はじめ、よく集まっていたことを思い出します。

2018年に心臓の手術をなさった後も、もとのように元気に回復され、87歳で血液の病気に罹患されても、苦しい治療にも耐えていらっしゃる様子を伺いながらも、きっと回復されると信じていました。思うように面会できない中で、時に電話をさせていただいても、病状をしっかりとお話されながら、「自分は大丈夫だから、研究室の皆さんにも大丈夫と伝えてください」とおっしゃっていました。昨年ちょうど88歳を迎えられ、みんなで米寿のお祝いをして思っていた矢先に病気になられ、開催できなかったことが悔やまれます。

何事に対しても前向きに一生懸命頑張った先生のことを思いだしながら、私たちが精進していきたいと思います。どうぞ安らかに眠りください。

下野 信行 記

（九州大学病院総合診療科/グローバル感染症センター 教授
一般社団法人日本感染症学会 理事）